

動詞由来の談話標識における 自律性と非自律性の弁別

— フランス語の *tu vois* と *tu sais* を例として —

川 島 浩 一 郎*

1. はじめに

たとえば *tu vois* や *tu sais* のような動詞記号素の実現形を中心とする表意単位の実現形が、「談話標識」として用いられることがある。実際 (1) の *tu vois* や (2) の *tu sais* のような実現形は、談話標識とみなされることが少なくない。

- (1) *Tu vois*, j'ai tenu parole, et toi aussi. (Marc Levy, *La prochaine fois*, Collection Pocket, 2004, p.250)
- (2) *Tu sais*, les gens changent quelquefois... (Anna Gavalda, *Ensemble, c'est tout*, Collection J'ai lu, 2004, p.104)
- (3) Je m'ennuie avec Annabelle, elle n'est pas *franchement* drôle. (Marc Levy, *Le voleur d'ombres*, Collection Pocket, 2010, p.191)
- (4) Ils riaient ensemble. Le bonheur, *quoi!* (Françoise Dorin, *La rêve-party*, Collection Pocket, 2002, p.174)
- (5) Non, c'est pas vrai. Dites-moi que c'est une blague, *là*. (Agnès Abécassis, *Les tribulations d'une jeune divorcée*, Collection Pocket,

* 福岡大学人文学部教授

2004, p.104)

ただし、どのような実現形を談話標識として認定するかという定義の問題については、かならずしも共通理解があるわけではない。統辞的な概念として定義すべきなのか語用論的な概念として定義すべきなのかも、かならずしも明確ではない。談話標識の定義は、談話概念や標識概念をどのように理解するかにもよる。どんな実現形をそこに含めたいかという定義そのものの出発点にもよる。たとえば (3) の *franchement*、(4) の *quoi*、(5) の *là* が談話標識であるのかそうでないのか（談話標識とみなすべきかそうでないか）の判別は、考え方にもよると思われる。

本稿では主に、*tu vois* や *tu sais* のような「動詞記号素の実現形に由来する談話標識」と「談話標識ではない表意単位の実現形」の相違を、統辞的な観点から分析する。とくに従属性、独立性、自律性、非自律性という4つの統辞概念を用いる。結論の一部を先取りして言えば、前者つまり談話標識は、従属的かつ非自律的な表意単位の実現形である。従属的であることと非自律的であることは、本稿において、同義ではない。また動詞記号素の実現形に由来する談話標識の成立には、自律性と非自律性の弁別が欠如した状態から、その弁別がある状態への移行というプロセスが含まれる。つまり、このタイプの談話標識が非自律的であるのは、備えていた自律性を失った結果ではない。

2. 従属概念と独立概念

2.1 統辞的な従属性

表意単位の実現形の出現が、他の表意単位の実現形の存在を前提にしていることがある。たとえば (6) における *votre* という実現形は、その出現が *montre* の存在を前提としている。実際 (6) から *montre* を除去すれば、それにともなって、*votre* もまた (6) から姿を消す。また (6) から *avance* を除去すれば、*montre* は、それが主辞であるという (6) における存在理由を失う。

この *montre* は、*avance* という動詞記号素の実現形が要請する主辞だからである。つまり (6) における *montre* の出現は、*avance* の存在を前提にしていることになる。

(6) *Votre montre avance.* (Sébastien Japrisot, *L'été meurtrier*, Collection Folio, 1977, p.215)

(7) *Elle ment mal.* (Serge Brussolo, *La fenêtre jaune*, Collection Le Livre de Poche, 2007, p.234)

表意単位の実現形の出現が、他の表意単位の実現形の存在を前提にするとき、前者は後者に従属すると言われる。このタイプの関係は、依存あるいは限定と呼んでもよい。たとえば (6) において、*vous* は *montre* に従属する。同じく (6) の *montre* (あるいは *vous montre*) は、*avance* に従属する。

よって従属的な実現形は、その有無が、他の表意単位の実現形の存在に本質的な影響を与えないような実現形でもある。たとえば (7) における *mal* の有無は、他の表意単位の実現形 (*elle ment*) の存在に本質的な影響を与えない。つまり (7) の *mal* は、従属的な実現形と考えてよい。

なお表意単位の実現形が他の表意単位の実現形に従属するとき、前者を実現形とする表意単位もまた、後者を実現形とする表意単位に従属すると言われる。つまり *vous* を実現形とする表意単位は、(6) において、*montre* を実現形とする表意単位に従属する。同様に *montre* (あるいは *vous montre*) を実現形とする表意単位は、(6) において、*avance* を実現形とする表意単位に従属する。

2.2 独立性と動詞記号素

2.2.1 統辞的な独立性

他の表意単位の実現形の存在を前提にしていない「表意単位の実現形」は、統辞的に独立した実現形である。つまり、統辞的な独立は統辞的な非従属であ

る (2.1 を参照)。たとえば (8) の *entre* に含まれる動詞記号素の実現形は、独立的な実現形である。この *entre* に含まれる動詞記号素の実現形は、その出現が他の表意単位の実現形の存在に従属していない。(9) の *oui* や (10) の *beurk* についても同様である。(9) の *oui* や (10) の *beurk* には、その出現が他の表意単位の実現形の存在に依存していない実現形が含まれる。なお実現形そのものも、その実現形自体に「含まれる」と表現できることとする (つまり「*oui* という実現形は *oui* という実現形に含まれる」と表現してよい)。

(8) *Entre !* (Françoise Dorin, *En avant toutes !*, Collection Pocket, 2007, p.101)

(9) — Bruno Chaval ? — *Oui*. (Katherine Pancol, *Les yeux jaunes des crocodiles*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.59)

(10) *Beurk !* (Guillaume Musso, *L'appel de l'ange*, Collection Pocket, 2011, p.90)

表意単位の独立的な実現形は、その内部に、独立的な実現形を含んでいる。表意単位の実現形の内部にある実現形がすべて従属的であれば、全体の実現形も従属的にならざるをえない。たとえば (8) の *entre* が独立的であれば、この *entre* の内部には独立的な実現形が含まれると考えざるをえない。内部にもし独立的な実現形が何も含まれていなければ、この *entre* が全体として独立的であるはずがない。独立的な実現形を含んでいない表意単位の実現形は、独立的な実現形ではありえない。

文は、一般的に、表意単位の独立的な実現形である。文の出現は、他の表意単位の存在を前提していないからである。これは、文の定義そのものでもある¹。

よって文という表意単位の実現形の内部には、必然的に、独立的な実現形が

¹ Meillet (1903) や Bloomfield (1933) を参照。

含まれると考えてよい。独立的な実現形を含んでいない表意単位の実現形は、独立的な実現形ではないからである。文の内部に含まれる表意単位の「独立的な実現形」は、述辞と呼ばれる。文が全体として独立的な実現形であるのは、その内部に述辞があるからにほかならない。

2.2.2 動詞記号素

動詞記号素の実現形を含んだ実現形は、独立的な実現形として現れる潜在性を備えている。従属的な実現形としてしか使用できないような「動詞記号素の実現形を含んだ実現形」は、存在しない。従属的な実現形としてしか使用できないような「動詞記号素の実現形」は、存在しないからである。たとえば、動詞記号素の実現形を含んだ (11) における *je t'aime* は、従属的な実現形である (従属節)。この *je t'aime* の出現は、*je crois que* という他の表意単位の実現形の存在を前提にしている (2.1 を参照)。しかし、*je t'aime* という実現形は (12) にみられるように、他の表意単位の実現形の存在を前提にしていないこと (つまり、文であること) もある。

(11) *Je crois que je t'aime, [...].* (Frédéric Beigbeder, *99 francs (14,99 euros)*, Collection Folio, 2000, p.197)

(12) *Je t'aime.* (Dennis Etchison, *Rêves de sang*, Collection Le cabinet noir, 1998, p.206)

したがって動詞記号素の実現形は、潜在的に、独立的な実現形であると考えてよい。動詞記号素の実現形を含んだ実現形は、潜在的に、独立的な実現形だからである。つまり動詞記号素は、本質的に、独立的な表意単位である。実現形を従属的な実現形としてしか使えないような動詞記号素は、存在しない (2.2.1 を参照)。動詞記号素は、いわば、述辞に特化した表意単位である。

3. 統辞機能の標示

3.1 統辞機能と線状性

構成要素が次の性質 (a) と性質 (b) を兼ね備えた対象は、線状性をもつと言われる。性質 (a) 構成要素が、一方向的な順序にしたがって展開する。性質 (b) 複数の構成要素が同時に現れない。

音声は、線状性をもつ。音声は、時間軸に沿って継起的に展開する。よって、性質 (a) を備えている。また、複数の音声を同時に自由に発信することはできない。よって音声は、性質 (b) を備えている。

したがって、言語が音声として実現する場合、その実現形は線状性をもたざるをえない。言語の音声的な実現形には、線状性という制約があると言ってよい。

言語の音声的な実現形では、音声を発信する順序を選択することができる。音声は、性質 (a) を備えているからである。たとえば [t] と [u] は、[tu] という順序で発信することもできれば、[ut] という順序で発信することもできる。このような発信順序の選択を、連辞的選択と呼ぶ。

言語の音声的な実現形では、複数の選択肢から一つを選んで発信することができる。音声は、性質 (b) を備えているからである。たとえば [i] の前という環境での音声の選択肢から [d] を選択することもできれば (つまり [di])、同じ環境で [l] を選択することもできる (つまり [li])。このような同一環境にある選択肢からの選択を、範列的選択と呼ぶ。

言語の音声的な実現形において可能な操作は、連辞的選択と範列的選択しかない。音声的な実現形には、線状性があるからである。なお「音声的な実現形」という概念には、音声的な実現形を文字として転写したのも含まれるとする²。

² 文字の使用には、線状性を逸脱するものもありうる。文字は音声を記号化したものではあっても、音声そのものではない。

3.2 統辞機能の基本的な標示方法

統辞機能は、表意単位の実現形が配置される位置によって標示されることがある。たとえば (13) の Marc が直接目的辞であることは、主辞である Olivia との相対的な位置関係によって標示されている。

(13) *Olivia regarde Marc avec admiration.* (Nicole de Buron, *Vas-y maman*, Collection J'ai lu, 1978, p.55)

(14) *Tu le connais ?* (Marc Levy, *Sept jours pour une éternité...*, Collection Pocket, 2002, p.61)

統辞機能は、機能辞の使用によって標示されることがある。機能辞という用語は、他の表意単位の実現形の統辞機能を標示するための表意単位を指す。たとえば (13) における *avec admiration* の統辞機能は、*avec* という機能辞の実現形によって標示されている。

統辞機能は、表意単位に含意された性質によって標示されることがある。たとえば (14) の *tu* が主辞であることや *le* が直接目的辞であることは、これらを実現形とする表意単位そのものに含意された性質である。

表意単位の実現形が担う統辞機能を標示する基本的な方法には、上記の三種類 (ないしは、この三種類に基づいた組合せ) がある。統辞機能の基本的な標示方法は、この三種類しかない³。言語の音声的な実現形には、線状性があるからである。言語の音声的な実現形において可能な操作は、連辞的選択と範列的選択しかない (3.1 を参照)。統辞的な操作には、つまるところ、表意単位の選択 (範列的選択) と表意単位の実現形を配置する順序の選択 (連辞的選択) しかないのである。

³ Martinet (1979) や Martinet (1985) を参照。

4. 自律性概念と非自律性概念

4.1 統辞機能についての自律性

統辞機能が標示された状態にあることを、自律的という用語で表現する。たとえば (15) における *je*、*Marie*、*depuis longtemps* は、それぞれ自律的な実現形である⁴。(15) における *je* が主辞であることは、*je* を実現形とする表意単位に含意された性質によって標示されている。(15) における *Marie* が直接目的辞であることは、相対的な位置関係によって標示されている。そして (15) における *depuis longtemps* の統辞機能は、*depuis* という機能辞の実現形によって標示されている (3.2 を参照)。

(15) *Je connais Marie depuis longtemps.* (Andrea H. Japp, *La saison barbare*, Collection J'ai lu, 2003, p.238)

(16) — *Sibylle, tu vas t'excuser.* — *Non !* (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.73)

自律的な実現形は、統辞機能の標示が必要とされた実現形である。統辞機能の標示を必要としない実現形であれば、自律的である必要もない (4.3 を参照)。つまり (15) の *je*、*Marie*、*depuis longtemps* は、それぞれ、統辞機能の標示が必要とされた実現形だと言える。

統辞機能の標示が必要とされる実現形は、従属的な実現形である。独立的な実現形は、その出現が、他の表意単位の実現形の存在を前提にしない (2.2.1 を参照)。出現が他の表意単位の実現形の存在を前提としない実現形は、統辞機能の標示を必要としない (4.3 を参照)。たとえば (16) における *non* は、表意単位の独立的な実現形である (2.2.1 を参照)。この *non* は、統辞機能の標示を必要としない。この *non* の出現は、*non* を実現形とする表意単位を選択した結果にすぎない。つまり (16) における *non* の成立には、*non* を実現形

⁴ Martinet (1979) や Martinet (1985) を参照。

とする表意単位を選択しさえすれば、統辞機能の標示は必要ない。独立的な実現形であれば、統辞機能の標示は必要ないのである。

したがって、表意単位の自律的な実現形は、従属的な実現形であると言ってよい。たとえば (15) における *je*、*Marie*、*depuis longtemps* は、それぞれ、従属的な実現形である。自律的なこれらの実現形は、「自律的であること」と「非自律的であること」の弁別の存在を前提にしていると言ってよい。この弁別なしには、自律的であることも、非自律的であることも成立しないからである⁵。

4.2 統辞機能についての非自律性

表意単位の實現形には、非自律的な實現形がある。自律的という概念は、統辞機能が標示された状態を意味する (4.1 を参照)。たとえば (17) における *Glover* や *Mathias* そのものは、非自律的な實現形である。(17) の *Glover* や *Mathias* は、相対的な位置関係という情報を与えられることによって、主辞ないしは直接目的辞という統辞機能が標示されている。(17) の *tendresse* も、単体としては、非自律的な實現形である。この *tendresse* の統辞機能は、*avec* という機能辞の實現形の存在によって標示されている。

(17) *Glover* regarda *Mathias* avec *tendresse*. (Marc Levy, *Mes amis Mes amours*, Collection Pocket, 2006, p. 28)

(18) *Merci*. (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.123)

非自律的な實現形は、通常、統辞機能の標示が必要とされる實現形である。統辞機能の標示を必要としない實現形であれば、それを自律的な状態にする必要もない (4.3 を参照)。たとえば (17) において、位置という情報を考慮に入れない *Glover* や *Mathias*、そして単体の *tendresse* は、いずれも、統辞機能

⁵ 意味や概念の成立には、その前提として、弁別が必要である。「真」と「偽」の弁別がなければ、「真」概念も「偽」概念も成立しない。

の標示が必要とされた実現形だと言える。統辞機能の標示が必要だからこそ、位置という情報や機能辞の実現形が与えられたと考えざるをえないからである。

統辞機能の標示が必要とされる実現形は、従属的な実現形である。独立的な実現形は、その出現が、他の表意単位の実現形の存在を前提にしない (2.2.1 を参照)。出現が他の表意単位の実現形の存在を前提としない実現形は、統辞機能の標示を必要としない (4.3 を参照)。たとえば (18) における merci は、表意単位の独立的な実現形である (2.2.1 を参照)。この merci の出現は、merci を実現形とする表意単位を選択した結果にすぎない。つまり (18) の merci の成立のためには、merci を実現形とする表意単位を選択しさえすればよい。そこに、統辞機能の標示は必要ない (4.1 を参照)。

したがって、表意単位の非自律的な実現形は、従属的な実現形であると言ってよい。たとえば (17) における、位置という情報を考慮に入れない Glover や Mathias は、従属的な実現形である。また (17) の tendresse も、従属的な実現形である。非自律的なこれらの実現形は、「自律的であること」と「非自律的であること」の弁別の存在を前提にしていると言ってよい。この弁別なしには、自律的であることも、非自律的であることも成立しないからである。

表意単位の非自律的な実現形は、通常、自律的な実現形の一部である。表意単位の実現形は、それが独立的な実現形でないかぎり、何らかのかたちで統辞機能を標示する必要があるからである (4.3 を参照)。たとえば (17) において、非自律的な「位置という情報を考慮に入れない Glover や Mathias」は、自律的な「位置という情報を考慮に入れた Glover や Mathias」の一部だと言ってよい。(17) において非自律的な tendresse は、自律的な avec tendresse の一部分だと言ってよい。

4.3 独立性と自律性

表意単位の独立的（非従属的）な実現形は、自律的な実現形ではない。表意単位の自律的な実現形は、従属的な実現形だからである（4.1を参照）。独立的な実現形の成立は、それを実現形とする表意単位の選択さえあれば（統辞機能の標示をとまわずに）成立する。たとえば文は、独立的な実現形である（2.2.1を参照）。文は、表意単位の自律的な実現形ではない。文には、統辞機能の標示がない。実際（19）の *on se dépêche* や（20）の *dépêche* は、これらの実現形全体として、統辞機能の標示をとまっていない。

(19) *On se dépêche!* (*Elle*, 11 avril 2005, p.116)

(20) *Dépêche!* (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.122)

表意単位の独立的（非従属的）な実現形は、非自律的な実現形ではない。表意単位の非自律的な実現形は、従属的な実現形だからである（4.2を参照）。たとえば文は、表意単位の非自律的な実現形ではない。文には、統辞機能の標示が不必要である。実際（19）の *on se dépêche* や（20）の *dépêche* の実現形全体にとって、統辞機能の標示は不必要である。

したがって、表意単位の独立的な実現形には、自律的な実現形と非自律的な実現形の弁別がないと言うことができる。表意単位の独立的な実現形は、自律的な実現形ではない。また、非自律的な実現形でもない。そこには「自律的であること」と「非自律的であること」の弁別はないと考えざるをえない。よって文は、本質的に、「自律的であること」と「非自律的であること」の弁別を備えていない実現形である。

動詞記号素の実現形には、本質的に、自律的な実現形と非自律的な実現形の弁別がない。動詞記号素の実現形は、潜在的に、独立的な実現形だからである（2.2.2を参照）。つまり動詞記号素は、本質的に、「自律的であること」と「非自律的であること」の弁別を備えていない表意単位であると考えられる。

5. 談話標識 *tu vois* および *tu sais*

5.1 談話標識における従属性

たとえば *tu vois* や *tu sais* のように、動詞記号素の実現形を中心とする表意単位の実現形が、いわゆる「談話標識」として用いられることがある。たとえば (21) の *tu vois* という実現形は、談話標識と考えてよい。(22) の *tu sais* という実現形もまた、談話標識であるとみなしてよい。

(21) *Tu vois*, l'argent peut tout... (Nicole de Buron, *Chéri, tu m'écoutes ?... alors répète ce que je viens de dire...*, Collection Pocket, 1998, p.128)

(22) *Tu sais*, les plages c'est pas trop mon truc. (Maxime Chattam, *L'âme du mal*, Collection Pocket, 2002, p.28)

(23) *Tu vois* quelqu'un qui fume ? (Guillaume Musso, *Je reviens te chercher*, Collection Pocket, 2008, p.62)

(24) *Tu sais* l'âge qu'elle a ? (Françoise Dorin, *En avant toutes !*, Collection Pocket, 2007, p.161)

これらの談話標識は、表意単位の従属的な実現形であると言ってよい。動詞記号素の実現形を中心とする表意単位の実現形が独立的であれば、それを談話標識とはみなさない。たとえば (23) の *tu vois* や (24) の *tu sais* は、独立的な実現形である (2.2.2 を参照)。これらの *tu vois* や *tu sais* を、談話標識として認定する (ような定義をする) 必要はない。その利点がないからである。

実際、談話標識としての *tu vois* や *tu sais* の有無は、発話の他の部分の統辞関係に本質的な影響を与えない。たとえば (21) から *tu vois* を除去したとしても、発話の残りの部分 (*l'argent peut tout*) にみられる統辞関係に、本質的な影響は生じない。同様に (22) から *tu sais* を除去したとしても、発話の残りの部分 (*les plages c'est pas trop mon truc*) にみられる統辞関係に、本質的な影響は生じない。一方 (23) から *tu vois* という実現形を除去すれば、発話の残りの部分 (*quelqu'un qui fume*) の統辞関係に本質的な影響が生じる。

(24) から *tu sais* という実現形を除去すれば、発話の残りの部分 (*l'âge qu'elle a*) の統辞関係に本質的な影響が生じる。

5.2 談話標識における非自律性

たとえば *tu vois* や *tu sais* のような動詞記号素の実現形を中心とする談話標識は、機能辞を必要としない。たとえば (25) の *tu vois* や (27) の *tu sais* は、機能辞の実現形をともしない。それを必要ともしない。

(25) *Tu vois, tu mens aussi mal que moi.* (Marc Levy, *Le voleur d'ombres*, Collection Pocket, 2010, p.136)

(26) *Et puis après on va tâcher de faire acheter une pièce par un Frac ou par le Fnac, tu vois, [...].* (Jean Echenoz, *Je m'en vais*, Minuit, 1999/2001, p.190)

(27) *Tu sais, les jeunes gens, ça parle, ça parle.* (Françoise Sagan, *Aimez-vous Brahms...*, Collection Pocket, 1959, p.40)

(28) *C'est chouette, tu sais, comme boulot.* (Nicole de Buron, *Qui c'est, ce garçon ?*, Collection J'ai lu, 1985, p.100)

(29) *J'ai une belle moto, tu sais...* (Anna Gavaldà, *Ensemble, c'est tout*, Collection J'ai lu, 2004, p.43)

動詞記号素の実現形を中心とする談話標識は、位置による統辞機能の標示を必要としない。実際、談話標識としての *tu vois* や *tu sais* は、たとえば (25) から (29) にみられるように、文頭や文末に現れる可能性もあれば、文中に現れる可能性もある。少なくとも、それが配置される位置によって統辞機能を標示しているわけではない。

動詞記号素を中心とする談話標識を実現形とする表意単位には、統辞機能の標示が含意されていない。動詞記号素を含んだ表意単位の実現形は、独立的だからである。独立的な実現形は、統辞機能の標示を必要としない(4.3を参照)。

そこには「自立的であること」と「非自立的であること」の弁別がないのである。

したがって、tu vois や tu sais のような動詞記号素の実現形を中心とする談話標識は、非自立的な実現形であると考えてよい。自立的という概念は、統辞機能が標示された状態を意味する（4.1を参照）。動詞記号素の実現形を中心とする談話標識には、統辞機能の標示がない（3.2を参照）。統辞機能の標示をともしない表意単位の実現形は、非自立的であると言われる。一方、動詞記号素の実現形は「自立的であること」と「非自立的であること」の弁別をもたない実現形である。動詞記号素の実現形は、自立的でもなければ非自立的でもない（4.3を参照）。

つまり、動詞記号素の実現形から談話標識への派生には、自律性と非自律性の弁別がない状態から、その弁別がある状態への移行がともなうことになる。動詞記号素のような独立的な表意単位には、「自立的であること」と「非自立的であること」の弁別がない。談話標識としての実現形には、その弁別があると考えられる。動詞記号素の実現形を中心とする談話標識は、非自立的だからである（5.3を参照）。

5.3 談話標識における従属性と非自律性

たとえば tu vois や tu sais のような動詞記号素の実現形を中心とする談話標識は、従属的な実現形である。従属的な実現形であることは、いわば、談話標識であることの必要条件である（5.1を参照）。

これらの談話標識は、非自立的な実現形である。動詞記号素の実現形を中心とする談話標識は、統辞機能の標示をとまなっていない（5.2を参照）。その必要性もない。

- (30) *Tu vois, si j'avais un portable, ce serait plus pratique.* (Katherine Pancol, *Les yeux jaunes des crocodiles*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.438)

- (31) *Tu sais*, mon frère a un pote qui travaille aux Mœurs. (Brigitte Aubert, *Funérarium*, Collection Points, 2002, p.118)

したがって、*tu vois* や *tu sais* のような動詞記号素の実現形を中心とする談話標識は、その全体が、従属的かつ非自律的な実現形であると考えられる。たとえば (30) における *tu vois* は、従属的かつ非自律的な実現形である。同様に (31) の *tu sais* は、従属的かつ非自律的な実現形である。

- (32) Je me concentre, *même si ça ne se voit pas*. (Tonino Benacquista, *Tout à l'ego*, Collection Folio, 1999, p.127)

- (33) Il faut *que tu saches quelque chose...* (Guillaume Musso, *Seras-tu là ?*, Collection Pocket, 2006, p.318)

表意単位の従属的な実現形は、通常、自律的な実現形であるか、あるいは「自律的な実現形の一部」である。表意単位の自律的な実現形は、従属的な実現形である (4.1 を参照)。表意単位の非自律的な実現形も、従属的な実現形である (4.2 を参照)。非自律的な実現形は、通常、自律的な実現形の一部である。表意単位の實現形は、それが独立的な實現形でないかぎり、何らかのかたちで統辞機能を標示する必要がある (4.3 を参照)。たとえば (32) において従属的な *ça ne se voit pas* という實現形は、自律的な *même si ça ne se voit pas* の一部分である。この *même si ça ne se voit pas* が担う統辞機能は、*si* を實現形とする機能辞によって標示されている。また (33) において従属的な *tu saches quelque chose* は、自律的な *que tu saches quelque chose* の一部分である。この *que tu saches quelque chose* が担う統辞機能は、*il faut* を實現形とする表意単位に含意された性質によって標示されている。

つまり、實現形の全体が従属的かつ非自律的な表意単位の實現形であることは、*tu vois* や *tu sais* のような談話標識がもつ特質であると考えられる。表意単位の従属的な實現形は、多くの場合、自律的な實現形であるか、あるいは「自律的な實現形の一部」である。たとえば (30) の *tu vois* や (31)

の *tu sais* は、従属的な実現形ではあるが、自律的な実現形でもなければ「自律的な実現形の一部」でもない。

6. おわりに

表意単位の実現形の出現が、他の表意単位の実現形の存在を前提とするとき、前者の実現形は後者の実現形に従属すると言われる。一方、その出現が他の表意単位の実現形の存在を前提にしない実現形は、統辞的に独立した実現形であると言われる。動詞記号素は、本質的に、独立的な表意単位である。

表意単位の実現形が担う統辞機能が標示された状態にあるとき、その実現形は自律的であると言われる。統辞機能の標示をとまなわない状態にある表意単位の実現形は、非自律的な実現形であると言われる。

表意単位の独立的な実現形には、本質的に、自律的な実現形と非自律的な実現形の弁別がない。独立的な実現形には、統辞機能を標示する必要性がないからである。たとえば動詞記号素は、「自律的であること」と「非自律的であること」の弁別を備えていない表意単位である。

(34) *Tu vois, j'ai tenu parole, et toi aussi.* (Marc Levy, *La prochaine fois*, Collection Pocket, 2004, p.250)

(35) *Tu sais il y a un bébé dans le ventre de maman.* (Anna Gavaldà, *Je voudrais que quelqu'un m'attende quelque part*, Collection J'ai lu, 1999, p.22)

動詞記号素の実現形を中心とする談話標識は、従属的な実現形である。動詞記号素の実現形を中心とする表意単位の実現形が独立的であれば、それを談話標識とはみなさない。たとえば、談話標識とみなすことのできる (34) の *tu vois* や (35) の *tu sais* は、従属的な実現形であると言える。

これらの談話標識は、非自律的な実現形である。動詞記号素の実現形を中心とする談話標識には、統辞機能の標示が欠如しているからである。そこには、

機能辞による統辞機能の標示も、位置による統辞機能の標示も、表意単位に含意された性質による統辞機能の標示も欠けている。

つまり、動詞記号素の実現形から談話標識への移行には、自律性と非自律性の弁別がない状態から、その弁別がある状態への移行が含まれることになる。動詞記号素のような独立的な表意単位には、「自律的であること」と「非自律的であること」の弁別がない。談話標識としての実現形には、その弁別がある。動詞記号素の実現形を中心とする談話標識は、非自律的だからである。つまり談話標識が非自律的であるのは、備えていた自律性を失った結果ではない。

以上の考察から、*tu vois* や *tu sais* のような動詞記号素の実現形を中心とする談話標識は、その全体が、従属的かつ非自律的な実現形だと言うことができる。たとえば (34) の *tu vois* や (35) の *tu sais* は、全体として、従属的かつ非自律的な実現形である。

実現形の全体が従属的かつ非自律的な表意単位の実現形であることは、*tu vois* や *tu sais* のような談話標識がもつ特質である。表意単位の従属的な実現形は、多くの場合、自律的な実現形であるか、あるいは「自律的な実現形の一部」だからである。そこには、自律と非自律の弁別がある。たとえば (34) の *tu vois* や (35) の *tu sais* は、従属的な実現形ではあるが、自律的な実現形でもなければ「自律的な実現形の一部」でもない。談話標識は、それ全体が、非自律的な実現形である。

参考文献

- 秋廣尚恵 (2017) 「フランス語における情報標示の諸要素」『語学研究所論集』22 (東京外国語大学語学研究所), 47-53.
- 安斎有紀 (2011) 「自然会話における談話標識の表出と調整機能」『フランス語学研究』45 (日本フランス語学会), 1-18.
- Bloomfield, Leonard (1933), *Language*, Holt.

- 川島浩一郎 (2020) 「間投詞的な文と非間投詞的な文 従属という概念をめぐって」『ふらんぼー』 45 (東京外国語大学フランス語研究室フランス研究会), 51-70.
- 川島浩一郎 (2020) 「フランス語研究における同一視と弁別」『フランス文学論集』 55 (日本フランス語フランス文学会九州支部会), 27-42.
- 前島和也 (1997) 「口語における文末の là」『フランス語学研究』 31 (日本フランス語学会), 34-39.
- Martinet, André (1979), *Grammaire fonctionnelle du français*, CREDIF.
- Martinet, André (1985), *Syntaxe générale*, Armand Colin.
- Meillet, Antoine (1903), *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, Hachette et Cie.